

骨つ性土

リスのマークの『平和新書』は、愛されるあなたの図書館であることを念願としております。読書する喜びを一部階級のものだけにしないために、インタテームントを中心に企画する新書判でありたいと思っております。現代を鋭くえぐる鮮烈さ、読後感の豊饒さ、何よりもましてその面白さ——そんな本をつくるために、あなたとともに考えていきたいと思っております。

『平和新書』編集部

土性っ骨へ『すててこ大将』改題◇

定価 三〇〇円 へ平和新書◇

昭和41年1月15日 発行
昭和41年12月20日 三刷

著者 花 登 筐

発行者 徳 間 康 快

印刷 図書印刷
製本 高木紙工

発行所 徳 間 書 店

東京都港区新橋四の一〇
電話代表(四四)六一九一

乱丁・落丁はおとりかえします(検印廃止)

土性つ骨へ『すててこ大将』改題◇

花登 筐

装幀・さし絵 小島 功

てかけの子

五月の乾いた船場の道で、丁稚の秀松が重そうに、両手で杓を持って水をまいていた。水は、真っ直ぐ鈍く散った。不意に後から番頭の忠助の声が飛んで来た。

「あほんだら。その水のまき方は何じゃい。貸して見い」

怒った忠助は、秀松の手から杓をひったくると、片手でバケツを持ち、片手の杓で水をすくうとパツとまいた。水は水平に四方に散って、またたく間に、店の五間もある間口の前の道を濡らした。

「見て見い。こうやってまくのや。この船場では、金一升、土一升、バケツの水一ぱいでもおろそかには出来ん。丁稚の水のまき方で、その店の良し悪しが分かるのや。よう覚えとけよ！」

そう言うのと、バケツに杓を突っこみ、秀松に投げるように渡した。バケツの底が、イヤと言うほど、秀松の向こう脛を蹴った。秀松の目からポタリと涙が落ちた。

それを見て忠助は、

「あかんたれ！」

と呟くと、呉服問屋成田屋と染めぬかれたのれんをくぐって入って行った。

八歳の秀松は淋しさと口惜しさに泣いた。

「何でこんな目に逢わんならんやろ」

八歳の秀松にも、八歳なみの疑問があった。

厳密に言うのと、秀松は丁稚ではない。この家の次男坊なのである。戸籍謄本を調べると亡父前戸主成田秀吉の養子となっている。母の名は井川絹、つまり秀松は、てかけの子供なのである。

てかけと言うのは、妾の事であり、そう呼ばれる意味はいろいろある。旦那が手をかけた子供でもあり、手数をかける子供でもある。大阪の商人は、妾を持つ

ことを宥される。それは男の甲斐性である。だがその子は、てかけの子と称されて軽蔑の眼で見られる。そして、その殆どは、父の店で働かない。よく働いても、本当の子としての扱いはされないし時には、奉公人よりも軽視される。たまたま正妻に子がなく跡を継ぐ場合にも「あそこの当主は、てかけの子で……」と信用は割引きとなる。

主人が妾を持つことは男の甲斐性で信用にはそうかわりがないのに、その子供は軽蔑される。そんな土地柄なのである。理由は簡単、船場の商人の妾は、大抵芸妓と限られていたからである。秀松の母絹も、新町の芸妓をしていた。そんな芸妓の子供の秀松が、何故この成田屋へ引きとられたか、八歳の秀松には分からない複雑な事情があったのである。

秀松が生まれる十年前、明治二十年、倒産寸前の初代成田屋が漸く軌道に乗り出したのは、番頭の秀吉の手腕だった。初代成田屋は、袋物を中心にした問屋をやっていたが、江戸時代から明治へ移行されて行く時の流れを見る力はない。それを呉服物に切り換えたの

は秀吉であった。然も、思い切って柄も新しくし、上物を避け、自ら桐生、足利の産地まで出かけて行つては、銘仙の柄まで指定し、大衆の着物をアピールしようとした。それが当って、二、三年の間に、成田屋の呉服は船場中に知れ亘り、人々は、太閤秀吉と同名の秀吉を船場の太閤と賞めた。秀吉はその時三十歳、江州の貧農の家から丁稚奉公に来て十七年目であった。

先代には一人娘がいた。五黄の寅の生まれで、先代夫婦はせめて、兎のようにやさしく育つように、おうさと名前を付けたが、兎どころか、寅も顔負けするような我儘娘であった。顔はまあまあ十人並みの顔であったが、独占欲が強く、奉公人を虫けらの様に扱い、その上稽古ごとはおろか、炊事さえも手伝おうとしなかったから、二十歳になっても婿養子の口もなかった。先代がその婿養子に秀吉を望んだのは当然であった。

「なあ秀吉、頼むさかい、おうさの婿になってこの店の跡をついでくれ。おうさでは気に入らんやろと思うけど、あの子も嫁になったら一寸は改まる。それにそこはまあ、適当に遊ぶなり、女でもかこったりしたら

ええやないか」

父親がそうたのむ位だからおうさは余程悪いとは
んだつたのである。秀吉は承諾した。お店の旦那はん
の命令は絶対服従だつたのである。それに折角自分の
力で今日までにした成田屋に魅力があつた。秀吉が、
世間の同情の中に婿になつてから半年たつて先代は亡
くなり、御寮はんは一年後に病死した。秀吉は、二代
目、成田屋安之助を襲名した。仕事は順調にのび、も
うけはどんどんふえたが、生活は地獄であつた。おう
さが嫁になつても、我儘娘に変わりはなかつた。いや
益々ひどくなつた。

「あんたなんか婿にして損をした。うちやったらどん
な学校出のひとでも婿に來たい言うのに。それ喜ばん
とバチが当るで」

と自分の器量が良いと決めてかかっているのだから
始末が悪い。だから夜の床でも、秀吉から決して求め
ることはなかつた。おうさがその氣になると、

「あんた來なはれ、させたげます」

と招いた。秀吉がどんな疲れたときでも、体の調子

が悪いときでも、である。その上、何か氣に入らない事
でもあれば、その不機嫌を治そうとでもするように、
一晩に二度も三度も、

「あんた來なはれ」

と要求した。それを秀吉が少し拒むと、

「そうか、あんたはわてがイヤなんやな。女子衆のお
うめとでも出來てるのやろ」

とカツとして、女中部屋へとなりこみ、何も知らな
い女中をクビにした。これには秀吉も困つて腫れもの
にさわるように、おうさの言う通りにしていたから、
おうさは益々傍若無人に振まつた。秀吉はおうさの婿
になつた事を後悔した。

「米ぬか三合あれば養子になるなと昔の人はええこと
言わはる」

と呟いたがもうどうにもならない。そんなおうさと
の「あんた來なはれ」の関係から、二人の子供が生ま
れていたのである。どちらも女の子で、長女を糸子、
二つ下の次女を富江と名付けた。船場では、

「やっぱし、成田屋はんは、御寮はんの方が精が強い

よって、女の子ばかり生まれる」

と言った。

そんな秀吉が、別の女性を求めたのは当然のことだった。お絹は、元々父が近江の膳所藩の足輕をしていたのだが、明治維新の改革後、職もなく止むを得ず大阪の新町の葛屋から、絹奴と云う名で芸妓に出た。色が抜ける程白く、躰も正しくやさしい女だった。その絹奴と秀吉が初めて逢ったのは、明治二十九年も、明けたばかりの正月だった。同業者の新年宴会が、新町の重の家という料亭で開かれたが、日頃酒にも弱く、場慣れのしない秀吉が席を外し仲居に頼んで別の間で酔いをさましてしていると、水を持って入って来たのが、絹奴だった。

「酔いざめのお水どす。お寒いのやったら、おふとんを借りて来まひよか」

京都なまりでそう言うお絹を見て、秀吉は、心の休まる思いがした。およそ、この歳になるまで、女にこんな優しい言葉をかけてもらったことがないからであった。

「いや、よろしいおます」

ドキマギと答える秀吉に、微笑みで答えたお絹は、
「ごめんやす」

と秀吉の着物の袖に手をあてた。その秀吉の着物は、正月に、やっと一枚造った新しい外出着だった。お絹は、その袖をもつと、

「しつけ糸が残ってます」

「女子の着物のしつけ糸は男はんに切ってもらうとゲンがええそうどす。男はんのしつけ糸女子が切ったらどうなるかしりまへんけど」

と言い乍ら白い糸切歯を見せてキリリと噛んだ。お絹の髪から椿油の香りがこぼれ、香袋のジャコウの香りが、秀吉の胸をかき立てた。秀吉はぐっと耐えた。

その夜、秀吉は、おうさの、

「あんた来なはれ、させたげます」

と言うのに答えなかった。おうさは、返事のしない秀吉のふとんまで来て、

「あんた聞こえてるのやろ」

とゆり起こしたが、秀吉は眠ったふりをしていた。

おうさは、怒って、秀吉をゆすぶり、髪の毛を掴んで起こした。

「あんた、来なはれ言うてるのや」

「今日は行きとうおまへん」

そうキツパリ言つて手をふりほどき、ふとんへもぐつた。カッとしたおうさは「分かった。あんた今晚寄り合いで料理屋へ行つた言うてたな、そこへ芸妓が来たな。いや芸妓はあんたの相手になんかなれへん。そや、松島か飛田へ行つたやろ。どや。そんならええ。誰があんたなんかと寝たるかいな」

おうさは女中を叩き起し、離れへふとんを運ばせた。その間秀吉は知らない顔をして、ふとんにもぐっていた。秀吉の心は、はっきり決つた。

「わては、あの芸妓をおてかけはんにするのや。先代も宥さはったさかいな」

2

翌日から秀吉は、重の家へ日参した。いろいろな人について、芸妓を身請けするには、料理屋へ頼みに行

くのが一番だと聞いたのである。葛屋のおかみも、お絹は売れっ妓で気乗りはしなかったが、船場での成田屋の評判も聞き、身請けさせても損はないと知ると、お絹に相談した。お絹は、相手があの夜の男と知ると、「おまかせします」

と手を突いた。秀吉は、喜んで、生霊神社の裏手の路地に一軒家を借り、支度万端整えた。その間の費用が、身請け代五十円、家賃二円、家具、畳、ふすまの貼りかえ三円であつた。

明治三十年二月のある夜、秀吉は初めてお絹のしつけ糸をふるえながら抜いた。

秀吉こと二代目成田屋が、てかけを囲うたという噂は、船場中に拡まつた。だが誰一人としておうさの耳には入れようとしなかった。本来の風習ならば、当主の秀吉が、

「実は、これこれしかじかで」

と、本妻に話し、本妻が、妾に逢い、この女ならばまあええやろ、と言うことになったら、

「まあ主人のこと一つよろしうたのみますで。やや子

でも出来たらわてに言いなはれや」

と、暗に、生まれる子供は認めしまへんでと釘を一本さすところだが、そんな事をおうさに言ったらどんなことになるか。それを知っているからかくす事に協力する不文律が出来ていたし、奉公人も、

「どや、おてかけはんのこと、何とか御寮はんの耳に入れんようにしたげやないか。そやないとあんまり且はんもお可哀そうや」

と、秀吉のために喜んでいようであつた。だから秀吉の妾宅通いも比較的樂であつた。といつても、夜は出られない、殆ど昼間仕事にかこつけて店を出るのである。お絹も秀吉の来るのを待ちうけた。そんなお絹を見て、飯たき代りに来ている母親のおすみが、

「仮にもお前は足輕の娘、それが妾風情になり下るのも、嘆かわしいのに、夜と昼とをさかさまにして、その上昼間にアレするとは御先祖様に何と申し訳けが立つやら」

と、ぐちをこぼしたが、秀吉の旦那面をしないやさしさに好意をもっているのか、秀吉が来ると、氣を利

かして露地の表で帰るのを待っていた。秀吉が、

「おかあはん、どうぞ家の中にいてとくれやす」

と言うと、首を横に振って、

「わての家は、家代々の足輕、門番には慣れてます」

と答えた。そしてその三カ月目にお絹は子供をみごもった。初孫が出来るのを知るとおすみは喜び、

「何とか男の子やとええのになあ」

と言うのを、お絹はとんでもないと言う顔で、

「わては、女の子を産むんどす。御本宅には男のお子がおいやへん。もし男の子を産んだら、あの且はんのこと。跡とりにもと言うてくれはったら、御本妻さんに申し訳けおへん」

と、答えた。秀吉は、溺愛するお絹の腹に、自分の子が宿つたと聞いて喜んだ。そして益々仕事に精を出した。自分が妾を囲うたために、店のもうけが減つたと言われたくないからである。おうさは相変わらず我儘だった。だが、秀吉は抵抗はもうしなかった。他にお絹という希望が出来たからである。その秀吉が顔を渋くしたことが起こった。お絹がみごもった一カ月後

におうさも、身ごもったのである。

「今度は、男の子を産んでやる。そやないと、どこで女囲うて、男の子でも産まされとかなんさかいな」

秀吉は、ドキリとした。だがおうさの耳には、お絹のことは入っていないようでホッとした。

それから七カ月、お絹は産み月、今日か明日かの腹を抱え、おうさの腹が九カ月目のときだった。おうさに、お絹のことを耳に入れる男がいた。先代の弟に当たる治三郎と言う袋物の小売屋の道楽男で、秀吉に、借金を申し込んでいるが、再三の事で相手にしなかった腹イセと、ここらでおうさに取り入り、手切れ話の仲介で金でもとろうとするコンタンであった。

「こう言う噂を聞いたんやけどなア」

と、前置きでお絹のことを切り出すと、おうさは身をふるわし怒り出した。

「おじさん、すぐそこへ連れて行ってくれやす」

「お前が行かんかて、わしが話つけたるがな」

「いりまへん。わてが行って、女に話つけて来ます」

「けど、こんな話は、間に入って、話つけないと、それ

に相手は水商売の女や、金で話つけないと」

「お金、何で金を出さんならんのだす、今日までこの成田屋の財産をへらしてた女子に、一文も出さんかてええ。あべこべ、お金とって来たる。この家の財産はわてのもんや。誰か人力車を呼び！ 人力車」

幸い秀吉は京都へ仕入れに行っており、騒ぎを聞きつけて来た番頭の忠助が、なだめようとしたが、あべこべ、

「お前も知ってて言わなかったんやろ、お前も同じ穴のムジナや。誰が番頭にしてやった。死んだお父はんやろ、それに養子の肩をもって恩知らずが」

と、どなられ、必死で止めるのを振り切って、治三郎に案内させて生霊神社へ人力車を飛ばさせた。

生霊神社の界限には、文楽の芸人が大勢住み、太三味線の音が昼日中から聞えてくる。人力車から降りてその太三味線の音を聞くや、おうさは益々激昂した。困った治三郎が、

「な、おうさもう一回考えなおし、わしに任しとき」

「何言うてる、どこの家や言わなんだら一軒ずつ聞い

たる」

と、近所の門口さえ叩きかねない勢いなので金をあきらめ治三郎はおうさに家を教えた。おうさは、五黄の寅そのものの形相で格子戸を開けて、この世の声とも思えぬ声で、

「ここか、成田屋のてかけの家は」

と、どなった。出て来たおすみは、さすが足輕の妻落ち着いて聞き返した。

「あんさんは、どなただす」

「わては、成田屋の家付娘、本妻だす」

「あんさんが」

「お絹という女はどこや、逢いたいのだ」

おすみが止める間もなく上へ上がった。唐紙を開けると、床に入っていたお絹が、覚悟をして、起き上がろうとして、

「御寮はん、すんまへん」

と、あやまるのを、立ったまま見下し、

「あんたがお絹か！ 立ちなはれ！」

とふとんをめぐった。ふとんの下には、十カ月の腹

があった。

それを見るや心臓の止まる様な声で、

「子供を産む気やな！」

と言うなりおうさは腹を押え、かがみこんだ。あまりの激昂に急に産気づいたのである。同時にお絹もショックで陣痛が始まった。

翌朝、妾の家で、本妻と妾が枕を並べて、殆ど同時に子を産んだ。

どちらも男の子であった。

喜んだのは産婆だけだった。

3

本妻のおうさと妾のお絹が、共に男の子を生んだことを聞いて秀吉が、生霊にあるお絹の家につけたのは、翌日の昼前だった。おうさは座敷に、お絹は台所で寝ていた。お絹の母親おすみは、

「ここは、自分の家やもん、お前は威張って座敷で生んだらええ」

と言うのを、

「いいえ、御本妻はと同じ座敷で生んでは罰が当たります」

と陣痛の苦しい体を這うようにして台所へ行ったのである。その遠慮のせい、お絹の子は七百匁、おうさの子は九百匁もあった。

本妻と妾が同じ家で子供を生んだことは、すでに産婆の口からその夜のうちに近所に洩れ、秀吉が、どちらを先に見舞うかと興味を持ったが、秀吉が先に見舞ったのはお絹の方だった。

「お絹、男のやや子生んでくれたんやてなあ」

お絹のキャシヤな掌を撫ぜるように秀吉が目を細めて言うのに、お絹は、

「早う、御本妻さまを」

と、うながした。秀吉は洩々立ち上がって、重そうに座敷のふすまを開けた。おうさは、秀吉を見るとジロリと白い眼で睨んだ。

「どうや」

と殆どおうさを見ずに、傍の寝ている子だけ見て、

「ほう、寝とるなあ」

と事務的だった。さすがにおうさはどなるだけの氣力もなく、ただ秀吉を睨みつけているだけだった。

そこへおすすめが買物から帰り、顔を出し、秀吉を手招きして外へ連れ出した。外へ出るとおすすめは、突っかかるように、

「えらい騒ぎでした、あの時やや子生まれなんだから、うちの娘は殺されてたかも知るまへん」

「えらい、すんまへんでした。まさかこの家を知って来るとは思いまへんでした」

「秀吉はん、言うときますけどな、娘の方があの本妻はんより十分早う生まれましたんやで」

秀吉はそれを聞くと大きくうなずいた。

おうさが船場の家へわが子と帰って来たのは、それから五日後だった。人力車から降りると、興味深く集まってくる近所の商家の連中のいる前で、

「忠助どん、塩や、塩かし」

塩を持ってくるなりパツパツとふりかけ赤ん坊の額にもちょいとつけた。そして奉公人の挨拶に会釈も返

さず座敷へ入ると、着ているものを全部脱ぎ、女中のお春に、着がえを手伝わし、

「あ！汚な。まだてかけの匂いがする。この着物洗い張りに出すのやで」

と身をふるわせ、もう一度忠助を呼んだ。

「秀吉はどこへ行ったんや」

「へえ、神戸まで商いにお出かけだす」

「親せきを皆呼びなはれ、相談がある言うてな、すぐやで」

「けど御寮はん、旦那はんがお帰りやしてから」

「旦那はん、秀吉は旦那やない。この家はわてのもんや、早う呼び」

忠助は、これ以上さからうとどうなるか分からぬので、すぐさま、丁稚を使いに出した。お絹のことを注進に來た叔父の治三郎、堺にいる先代安之助の従姉妹のせい、天満の母方の叔父に當る餅屋の与兵衛、守口とその弟の末次郎、築港の又従姉妹のお度が何事かと続々集まったのは、もう日も暮れかけた頃だった。どの親せきも、あまり裕福な者はなく、成田屋からの招

集と聞いて、晩飯の御馳走にでもありつけると、中には、子供三人引き連れて來たものもあった。

やがて集まった親せきの前で、飯も出さずにおうさが口を切った。

「今日、あんさん方に來てもろたんは他でもおまへん。秀吉を不縁にしたいと思うてだす」

一同はあっけにとられた。不縁と言うのは離婚のこと、いくら女系家族の多い船場でも、主人や隠居が娘婿養子を離婚さすことはあっても、嫁が亭主の離婚を宣言するのは先ずないことである。

「おうさはん。早まったことをせん方がええのんと違うか」

一番年かさのおせいが口を出すと、

「おばさん。それと言うのもあの秀吉がてかけを囲っていたのが分かったんだす。その秀吉がこの家の跡取りで、わてが嫁に貰われて來たんなら何も言いまへん。けど、あの男は、うちの丁稚やったんや。それを死んだお父はんが目をかけて、番頭からこの店の婿養子にしてやった、この店に大恩ある身体やおまへんか、そ

れやのに、お父はんの財産を食いもんにしててかけを造り、あげくの果てが、てかけにやや子生ますて、それでも辛抱せえちうのか」

叔父の治三郎が驚いたように声を出した。

「えッ、とうとう生みよったんか。どっちやった」

「わてと同じ男の子や。それに秀吉は、本妻のわてを後廻しにして、妾の方を先に見舞いよった。こんなことされて黙ってられるか」

ようやく一同から非難らしい反応が起った。おうさの性格を知るものなら、秀吉が、てかけを持ちたくない気持はよく分かる。だが、てかけと本妻がいて、てかけを先に見舞ったということは秀吉の行き過ぎ、怒るのも無理はないという非難だった。

4

秀吉が帰って来たのはそんなときだった。店へ帰ると忠助がとんで来て耳打ちをするのを、「仕事をつづけなはれ」とたしなめた。座敷へ入ると秀吉を見て一瞬皆は静まりかえった。

「やあ、これは皆さんようお越しで、今日はどなたかの御法事だったかいな」

「皆さんに集まってもらたんは、あんたのことや。決まるまで向こうへ行つとり」

おうさが喧嘩腰で言った。

「わての事で何だす」

「あんたを不縁にしよ思うてな」

「不縁、つまり出て行け言わはるんだすな」

「そうや」

「それで皆さんの御意見は」

秀吉は一座を見わたした。親せきの連中は、秀吉の視線を避けた。この何年間、秀吉から金や小遣いの恩恵を蒙らないものは、誰もなかったからである。おうさは続けた。

「皆さんもこのわての言うこと聞いてくれはるの当前だす。何せ死んだお父はんの親せきやもん」

「そうだすか。ほな仕様ありまへん不縁になりまひよ」

「秀吉どん、何やったら、ここはひとつあやまった方

「がええのんと違いますか」

与兵衛が乗り出した。与兵衛も小遣いかせぎをねらっている一人である。

「折角あんさんもこの成田屋の旦那にならはって」

「かましまへん。わては出て何も不自由はおまへん。けど言うときますけど、店にある金や品物は皆わてが頂きますで」

「何やて、何言うのや、お金は家付娘のわてのもんや」

おうさが立ち上がった。

「いや、御先代様がお残しになった成田屋は袋問屋、この呉服問屋にしたのは、わてがしたのでございませう。今の金も、わいが残した金、御先代様がお残しになったのは借金だけ。そら成田屋ののれんがあつたさかいやっついていけたこともありますやろ。そやよつてに借金まで勘定しよとは言いまへん。借金はないことにして残ったお金だけは頂いて行きまひよ。後はどうぞよつしように」

そう言う座敷から出て行った。

「何やて！ 泥棒！ 誰が渡すかい！」

と秀吉の背中へののしつたが、秀吉の言い分は当然であつた。今日の成田屋にしたのは秀吉の力、

「成田屋はんは、ええ婿をとらはった。あれは船場の太閤さんや」

とその功績を誰一人認めないものはなかったからである。今度は、親せきがおうさをなだめにかかった。

「おうさはん、秀吉はんの言うのは一理ある。どこの旦那はんは仲に入つてもろても、そういうことになるで」

「そうです。ここは一つおだやかに話せんと、秀吉はんがいんかったら、この成田屋ののれん降さんなりまへん」

おうさは言う事を聞かなかった。

「わてが商いをやる。お金がのうても、わてが奉公人を使うて立派に商いをやります」

その奉公人たちは、すでに秀吉がこの家を去ることを知っていた。音松と言う丁稚が隣の部屋から聞いていたのだ。音松から丁稚たちへ、丁稚から手代へ、手

代から番頭へ話は流れた。大番頭の忠助は、ここぞとばかり大石内蔵介ばりに座敷へ入って来た。

「御寮はん」

平伏する忠助に、おうさはいいいきに来てくれたと言わんばかりに、

「忠助、秀吉がおらんでもあんたはわてを助けてやってくれるな。あんたはお父はんの代からの番頭や」

「へえ。それは成田屋ののれんある限りやらして貰いとうおますけど、他の奉公人は、皆旦那が家出はつたら辞めさせて貰うと言います」

「何やて」

「御寮はん。それに、今の商い先、御先代からの顧客先やおまへん。皆旦那一人のつながり、おとくいも、旦那のもんだす。それにこのわても、残ってては、御寮はんと組んで旦那を追ひ出したようにいわれてはかないまへん。辞めさせて頂きます」

この忠助の発言は、おうさに敗北を教えた。与兵衛が又乗り出した。

「おうさはん。こら事荒立てん方が賢いで。どや、わ

いにまかさんか」

おうさは、敗北を知っても顔には出さず、

「勝手にしなはれ」

と急ぎ足に離れへ去った。一同はホツとした。与兵衛は、床の間の前へ行き、

「どうだす、皆さんもわてにまかして貰えまへんか」

と同意を得て、秀吉を探した。秀吉は、店の横にある金庫部屋で、そろばんを入れていた。

「なあ、秀吉はん。おうさはんも、納得した。今日の話なかったことにしてくれはらへんか」

「そら、忘れいわはるのだしたら忘れますけど、おうさはどう納得したんですやら。又こんな話になるなら、わてもかないまへんさかい」

「もう二度とこんな話ささへん」

「そんなら、生霊はんのお絹に関しても何も言わんてことだすなあ」

「何も言わさん。そこうまいことやり」

「いくら、あんさんが言わはっても、おうさがどない言いますか、はつきりしたこと聞かんと」